

第四詩集 100連詩(1)(1)

(対詩・寒河江光、三行詩限定)

1 光

見上げると季節の横風に蒼空の神経既に花めく

小宇宙につぼむパルスは言葉によって撃つと描き初めし時のめぐり

「国ははるかによそにあらうつくしい付加価値よこの恋はおもうはなからめくるめく」

2 冬

はかばか

墓墓、しく帰転の衛船、宇空より緩めき墜るる、汝れ風の民

虚の国より巡りて、何れか地の邦に迎えられむ、佳き時に必ず

もたげる鎌首、麻断のストレス、幾光年も永々なる、あの音階が、また

3 光

音楽、なにをおいてもまず音楽、わたしは

そのピアノの一音一音にこの世界の明析を取り返している。そして

どこからどこへ、かすかに張られた一本の共鳴線上に立っている。

4 光

何をおいても音楽だ。その余のことは文学にすぎない。と歌った詩人に熱い抱擁を贈る。

その流れようとする豊かな追憶をよくぞ残しておいてくれた人にゆっくりと遅れて

おもわず、夕べ湧き立つ垂直の氷のような感謝の言葉がゆらいでゆくのを見送ろう。

5 冬

あらゆる楽器の反響和音には「この世次元」からの逃避者を津波のように襲撃

する能力がある

宇宙の闇から先祖が一斉に経を唱えながら被さってくるのもうしませんゆるしてくださいというしかない

やがて輪廻の階梯が歪みアクシスが変換すればばらばらと役者がこぼれて来るこぼれて来る

6 冬

お逆巻く波波とわが杯に夢夢うつつ仲中に音音しみじみと想像のとりどり

否否と我に帰り鼓動の千千乱れ今宵も鬱鬱としじまに魂霊(たまたま)排回すると神神の呼び鼓轟轟

「震動するカメレオンの変態を見てはならない！」色々の魔が魔が背後から洞ら洞ら

7 冬

突然の春！残雪の春越境の春逃亡の春生残の春降伏の春悔苦の春落胆の春当然の春。諦観の春空無の春舞踏の春銘丁の春歓喜の春陶酔の春自棄の春半旗の春、偽満の春裏切りの春憤怒の春迎撃の春陵駕の春爛月の春さらば

8 光

千心百観を季の万華鏡とした我らの父祖よ

ボクタチは忘失の川を渡るところです

宇宙達の単調に克つ身体を僕等の子等にどうぞ与えよ

9 光

男忘れる

女恨む

遊べない子のいる天体は哀しく貧しい

10 光

例え恋多くあったとしても、心の角をつぎつぎに落していつてはならない。

孤独を研ぎ澄ますことがますます難しくなってしまうから。

雲丹のような体位の緊張によって大海の潮の流れもよく遊ばれるのだ。

1 1 冬

抑揚の干満うねり捻（ひね）られ捻（ねじ）れて揺れる数無し光年離れた星への旅程

目的も計画も荒唐無稽一夜にして落ちる桜花の焦りに急かされ出帆
はかなきは生きとし生けること夢見は死後世界反転の星々波の間に間に垣間見
て

1 2 冬

海を返せ、子供たちが未来を見つめるところ、ほかにない。
絶望の泥で埋めるな、コンクリートを建てるな、路を作るな。
未来がなくなったその日から、子供という動物は滅んだ

1 3 冬

ツルバラの赤い、海へと続く砂の道いつも夏だった、風は濡れて
目を逸して振り返った、誰もが一生に一度しか会えない少女を追う、と記憶は
突然翻転して
遠くエストニアを追想する、北欧の湖のような瞳の少女が夢に侵入する、革命
の午後（ひるさがり）。

1 4 光

「ターリン行きの船の出る港はどこですか？」
白夜の船着場でギターを抱えた白痴の男が聞いて回るのは、実は暗号
「ぼくも乗れますか？その船に」と聞き返すと扉を開ける秘密クラブのポン
びきで

1 5 光

いやあ、もだんたいむす外から見たんじゃ分からんもんじゃ
だだいすとなちのそれはもう大騒ぎも意外にお古風な野心の表現主義でねえ
固くなったペニスの如きパンをかじって手も口も耳穴までもジャムだらけ

1 6 光

初めは街角が本当に角である街がめづらしい。

そこから満月が裏通りを覗くのが観念論の幾何学で、

石畳に散らばったその欠けらの上に靴音立てるのが超越論の解析学。

17 冬

引出だらけのダリの脳みそ頸へと流れる時間の幽体20世紀という名の胴体を満たす

だが詩人よ、おまえの調味料は何をも満たせず塵のざまだ

責めて渦巻け竜巻となり時空を捻って裏返せ

18 冬

たれかおしへてきたさひ、とこのみなとからふねはてるの、たれかおしへてきたさひ、

ほくものれますかそのふねに、たれかつたへてきたさひ、つきのわらふはん、ふねはてる、

ほくのちちやははに、とふかゆるしてきたさひと、きたさひと。

19 冬

ターリヤン（大連）行きの飛行船に乗れる日を70年も待っていた老人達がいる空港

コクーンの実話が世界には幾つもあるものだ、こどもたちよ

人は必ず生まれた所に還えるのに、人生はメビウスの輪のような裏と表をグルグル回るんだらう、ね

20 光

童夢七紘、一紘残し根、遥雄くん

あさひののぼり、ゆうひのしずむ、うみはひろいかおおきいか

幼悔七変、一変代わりよ、暁雄くん

21 光

花花花、花花花花、花花花、一千代にー

花化ケタ、化花化ケタ、ヒイヒイヒ、一八千代に―
はなは、はなはな、はっなっはっ、一嗚呼―、花の定型三変化

2 2 光

なにをなくしてもいいの。いのちのわかれに。「超老婆超独白 i n ジヤパン語」
唯、季を、この季を、春を、そして秋も、それぞれの空と、それぞれの大地
を、

この骨肉に、―これ？は誰？―少し筒染み込ませて億事丈はシテ億積もり。
如の口邪。

2 3 冬

偶然の生の果てに、突然眺望した大陸。風に乗って見る前世の蝶観図
何億光年のピンホール攻撃にも等しい、進化の確率に賭けたきちがいたちよ
今祖国は退化しました羽化する兆しです、片道切符はもう只のコレクションにな
ってしまった

2 4 冬

一面の中国人一面の中国人一面の中国人一面の中国人一面の中国人
人は生まれ死に生まれ死に生まれ死に生まれ死に生まれまた死ぬ
久遠より国々の輪廻もまた因果に翻弄され蘇生を繰り返す食卓の上で

2 5 冬

さよなら、ゆめの残骸も掘り出せないから、ゆめのままだ
ゆめにはいつも証拠がない、だからゆめだ
ずっと覚醒しないで、高熱にうなされ乍魔界をさまよっていたかったのに。

2 6 光

あんたがネゴトでマカイ、マカイっていうの聞ってるよ。
このごろ、あたし夜中に目が醒めてるから。
それでね、ソーカイソーカイ、ソリヤホンマカイって聞いてやるんだ。

2 7 光

集められない女のアドレスを一つ教えてやりたい。
この頃、モノ集めが激しくて、と嘆いていた友に。
人生も下り坂で彼奴もそろそろメトレスにすがりたい。

28 光

夕べの風は墓石の回転ドアを廻って頬に触れ
この頃待ってる人の秋の巽へ音づれてゆく使者の先触れ
どうしてこれは肉を擦る乱交脈の 瑠の眼の震え

29 冬

メラン高原人頭馬車の群れ追い打ちに
あらゆる首領の死をもって制裁となす未来の王国
デスヴァレイに晒された処刑死体は千年後のミイラとり

30 冬

てふてふは革命のお訃げじっくり寄り道して来やがった
無為か有為か知らぬ間、敗残の海峡春めき
巨像は溶け出し小便みたい

31 冬

相反する物共の平均台が一番美しかった人生の中庸
時計が回ればそれも捻れる砂時計のくびれのように
落下する砂を随意に留めてみたいと神を演じる臨死

32 光

淫死・添死・縁死・連死・因果恐ろし頓頓死
それはジャズイーな酔生夢死
溢詩・壊詩・墜詩・尊厳詩・引導渡せ安楽詩

33 光

天井に地球という惑星の地図を貼って世に経る
暈のうえを叩きつける砂嵐、時にスコール、時に銃声、太熱の飢餓はしかし、

絶え間なくこの部屋を充滿して生産の堪え難き過剰を蝕んでいる

34 光

動詞に責められ接触の契機は移動の速度を失う、理神
形容詞が豊飾の意匠の眼を剥いで写体が裸形だ、朔日
何物も名指さない名詞となつて耳をすます暗闇の構文

35 冬

おお盤石（バンコク）！紅き空の下黄土のメナムに、余命の浮遊を託す神神に
ひざまづく時の如く あらゆる舟は交錯する、水に月に大地に、巢を焼かれた
蟻群のように行き惑うそして還る スコールよ来い突然にしかもすべ
てを洗い流してしまえ運命も叙情も時間も！

36 冬

コロニアルな午後の惰眠
演劇的でさえある近過去の連綿
配役を交換して茶化す猿の惑星

37 冬

してみれば、はらから、のたれし、ちせひの、もくろみ
あるひは、せつりの、ざびごふ、つみあげ、じけつを、さばかし
かみのな、かたりし、すめらの、つぐなひ、まつりの、みちゆき

38 光

きのふには、てれふみの、朕にゆふにて、あらなんとはなしに、いとをしか
あきれがほの、どくされる、あなあきてん、股きたりしてん、じよげがえろ
へちこびて、こんどろむ、莖けんろうで、すりこばち、ほだらけむとは、い
んごふや

39 光

聖戦の川渉る朝
武器いみじくも紛う方なき近代兵器

既に戦いは我に在りと絶対孤立を覚悟せし真夏日

4 0 光

俺の積分女の最暗黒部よりもまだ黒い俺自身の白日の投影
俺を収束する終えんの正午台地陰圧垂線上のフアック
眼下高熱都市の累乗にどうやってこだまするんだ叫び声口に頬張ったまま

4 1 冬

悔恨はしじまにゆらめきつつ熱中の夏終る
駅という駅は草叢に息絶えてシイナリーから消滅した
あれから帰還しない列車の走馬燈を捜しにゆこう

4 2 冬

しろからのはじまり、なにもみえないあさ、ほうもんしゃにかおがない
きみはきえさったきおくを、しろいさらにもって、よくたべるよいこだ
ひかりよこい、にじのすべくとるで、よくみえるまどをえがけ

4 3 冬

カンニバリズムの秋がきた！
サーカス、回転木馬、タイムマシン、神隠しと連想するブラッドベリの不条理
を

血を滴らせ歯ごたえを悦びながら胃袋へと流し込め、すべての大人子供たち
よ

4 4 光

三角形の月を胃の腑に納める
深夜の公園を歩く自分の裏側が見えてくる
彼は雨は隠れた月の光である

4 5 光

夜と朝の切断の病歴は永い
朝の叙情は湯気を、夜の叙情は霧を求め

中断の温度差が主人の心拍を止める

46 光

口を衝いた別れ際の言葉が妙に批評じみていたので
戸惑った女の顔がかえって思い出されるものになってしまふ
議論が残っては、別れにならないじゃないかこのモダンボーイ奴

47 冬

いろもはるもおくびにもださずにきはめてじむてきにすますせひしよく
いつからこんなにてれふみのやふになってしまったのかかんがへるあき
これもあれもきつとでひえぬえひにすっかりくみこまれていたんだろな

48 冬

永い旅のつれづれに人類のさいごについて考察するカリスマの吐血
ゆらめき燃える赤赤の祭壇に捧げて犠牲にわが身を削る歯痛
そして人はまた生まれ還える痛みにも勝る加虐的なオーラを背にして

49 冬

50年も100年も変わらぬ大陸都市のトロリーバスの架線に咲いたタンポポ
風に乗れ乗れ花粉の落下歴史を空から斜め読みしながら時間をゆっくり遡れ
一番何でも知っているのに何の知能も持たない花の遺伝子たちの愉しむ滅び

50 光

飛球を出迎えるために想像はひた走るスパイクによって押し潰される三ツ葉
の生殖器
夢の野原に忍び込む自己顕示のエキストラの三振無念、父よ。

三の三乗回繰り返される少年の春、時、場所、生命の三一致の法則の捧ぐ三
色花飾り

51 光

ターニングポイントの向こうの近代的パースペクティブは愈々刹那

天地人、松竹梅、真善美、雪月花、神霊肉、猪鹿蝶、と結構人迷わせる選択肢

右脳性停滞と左脳性けいれんを誘う意外とよう感のストップモーションして

52 光

頸に乗っているのは女頭の固定標本ゆくりと腐敗してゆくフェロモン漬け

眼は思考のルーティンを抽出しつつ観念靱帯を乾燥しゆくワイド囲み記事

午後三時、かくて愛の不在を際出たせつつ大進化はシリコン生物に傾いてゆく

53 冬

倭雑の未来都市の下水口から今しも破水する文福茶釜

綱渡り芸人は摩天楼天空のホームレスだよ人類の究極順応

オゾンホールの覗き穴から禁断の宇宙が垂れ下がる腐った葡萄のように

54 冬

ずっとひこうき、かぜにゆれゆれ、このはのように、まかれてとぶとぶ、

ていきあつめにとつにゆうだ、まけるなひこうき、ふらっぶだせだせ、

しかいはぜろでも、でんしよみちびけ、そうじゆうふのうの、これがひこうき。

55 冬

古都の秋について瞑想すると、もう古都の秋にいる。

時空を跳んだらもう平安京、未来人の群れなすみやこの賑わいに身を任すと天

皇が空から光臨する

だれも見えないように、触れないように、知らないふりをするのが歴史の礼儀

56 光

あれへいくのはおかるでないか

親の恵みし名に背く身重の秋の子宮体

観念パッサージュ狂行する男追ひの道すがらぞやマント裏炎上のクリムゾン

57 光

不能者となつて最後の自然から開放された。
輪廻に対してボランテイアであるという自由の一形式。
奉仕する女を嗅ぎ分ける嗅覚が鋭くなった。

58 光

納戸町の角をまがって刹那に受感する全環境論
セピア色の脳幹にインプットされた我がヴァイタルサインのモザイク
神話の牛が太陰を飛び越えている夜のX点が存在する

59 光

宙吊都市における歩行は飛行よりむしろずっと不安定な曲芸である
真砂坂から肴町、七軒町から伝習所、暗闇坂にはターナバウト、張り巡らされたルナパークのタイトロープの上に僕らは日常の上着を引っ掛けて笑ってみせる

60 光

食肉は断定
草食は設問
雑食は自家撞着する・・・鉱物が重要である理由

61 冬

動かぬは動かぬ、やられたらやる、とすごんでみれば、見上げれば富士が、
朱色の冬の、都会の夕空、くつきり稜線浮かんで動かず。
生と死の狭間に、生きとし生きることの無為、うつむけば下水道の迷路

62 冬

碧蒼の沼沼は森にも砂丘にも神神の棲み給ひし曇天の季順に咲く陰花植物として
吹雪は叫ぶブラックホールのような降雪のリバーズ映像は恐いよと

寒い夜はいやだいやだ時鐘だけが無を否定する何もない冬

63 冬

ネアンデルタール人のような優しい渡世はいらんかねと

ネアンデルタール人が眼鏡をかけたような男が売りにきたよ

この頃はやっぱりネアンデルタール人も宇宙人も混ざっているな

64 光

月の光に照らしてみれば人間の学問はつまるところ考古学と博物学

その余のことは技術にすぎない

おっと忘れちゃいけない詩とその注釈学

65 光

人間の感情はつまるところ淋しさと虚しさ

その余のことは錯覚にすぎない

これも忘れちゃいけないがその条件は月に対して三人であること

66 光

掘り起こす 裏返しにする 逆上る 暴き立てる 剥き出しにする 日の目
に曝す

見入る 食い入る 見通す 穴開ける 見透かす 射抜く 指し貫く 見遥
かす 視切る

書き留める 書き置く 書き残す 載せ記す 活き写す 書き尽くす 書き
に書く 書き継ぐ

67 冬

この世の夢の果てるところにある断崖絶壁から下を覗けば

何百光年もある深い谷底からネガの自分が自分をみている

落ちるんじゃない吸い込まれるんじゃない(覚醒するじゃないか)

68 冬

天地は震動し人の営みは蟻地獄にはまった蟻のようなものだ

だから一瞬の花が美しい刹那の平和が愛おしい叶わぬ夢が光となる
古代の都も王も総て震動しつつ瓦解した歴史は震動の結果である

69 冬

レールを走っていて突然レールを失うことはありませんか
現実の中にいて突然非現実になり記憶喪失したことはありませんか
あなたは単に覚えていないだけかも知れませんよ

70 冬

ゆきゆきこゆきこなゆきまゆきゆきわたゆきぼたゆきねゆき
ふるふるつもるふりつみつもれもりもはやしもきぎもえだましろ
しろしろそらからどうにもできないけせけせけしきをのこらずうばえ

71 冬

かくて幾歳、電信柱をもぎ取り、アスファルトをはぎ取り、地下道を埋め尽くし断層を溶接し、マグマを凍らせ、重力を操作し、あらゆる生物は化石となる
これほど安全な観光旅行地はどこにもないと、火星旅行社が喧伝する日

72 光

最後の月世界旅行案内はみな女が書いた
大騒ぎ散々し腐った世紀末の除夜の鐘が鳴ると実は一瞬にして新世紀の到来
だつ たと いう

てんから阿呆に呆れけえったそのあとの話さ

73 光

子どもとお話つてやつができりやあよかったが
何年も生きねえうちからもう眼ん玉あ冬海みてえに濁らしやあがつて
こりやあどうせろくなもんには成るめえと首の骨にちっと力入れて静かにさせたが

74 光

時間と空間の僅少差の堆積する世界秩序

均等は不在の理想状態でプラスとマイナスの序列が天然の苛酷

直感と解説には単一ベクトル定規による北方光束の解凍阻害（春遠き冬日）

75 光

浅黄色の細煙消え渋る待てば椎の落葉焚き

玄英凍日母は確実に老いて遠い

北風に煽られて舍利の如き言葉に向かって尚探り打つ点鐘のありやなしや

76 光

いつも殺してしまつてから気が付いているようだ

爪の間に残っていたわずかな血シャツについていた誰かの髪の毛、その物証

上目下目のやり方無害な話題の選び方人付き合いの避け方逃げ方そらし方、

その 心証

77 光

雪の日に女は火事を報せの鐘を鳴らす

雪の花、花の雪、燃え尽きんとする女である

女の中の男か知れぬが既にして焼け跡では血飛沫さえもが蒸発していた

78 冬

何十年ぶりに会った友はすっかり頭をやられて魂ごとすり代わっていた

こうやって男が一人一人死にきれずに征服されてしてゆくんだなあいつらに

受け売りの説教垂れがまた一台売りに出されていずれ植物になるだけだが

79 冬

キヤトルミューテイレイションされた恐龍の死骸を収集するボランテイア

底冷えの蒼き炎の背番号をその背につけて鯨もイルカも逃がしておやり

なにも殺さずなにも奪わずなにも犯さずこれが禁欲の三原則

80 冬

優しきことは美しきことだと誰にも押し付けてはならない

強きことは大きなことだと誰にも言い訳してはならない
偽善と勸善とが肩を組んで歩いて来ても虐めてはいけない

8 1 光

朝もどきに平面らしかった地層が裂断
民主主義の基底層の地盤にはいつも青天が吹き抜けておりまする
芋煮る鍋を中心の懐かしのサークル運動になみだなみだ

8 2 光

近代的原則と前近代的原理との可否
ではなにによって生きるかと問う人よ
生きるものに共有される感覚に聞け

8 3 光

さて日本語には人間という言葉がない
我がこの生の悲しみを静かに分かっべき見ずも知らずも
がっしりとした他人を敬う最小限の言葉がない

8 4 冬

あとらんだの月は両刃を砥ぎつつ研ぎつつ昇る
この森の街は突然覚醒して樹々は散髪を始める
星の夜明けだ！宇宙神の鼓動に同機する儀式だ

8 5 冬

フィラデルフィアの支配者に再会したよ
彼はマルセルその眼に万華鏡をもつ奴
20年前のあの日のままに汝れもヒッピー我もヒッピー旅硝子

8 6 冬

さよなら私の、夢多き日々よ

さよなら私の、哀嘆の日々よ
生殖の季節の終りかけに、我が息子の学ばん理科的な生殖の滑稽よ

87 冬

予定通りに夏、予定が嫌いなのにこれだけは嬉しい
蝶は灼かれ蟬は地に落ち子供達は長い眠りにつく
「戦争があつたんだ！」 とびきり高い向日葵が眩く

88 冬

遠い所から帰って来た君に労いの言葉はない僕達は待っていたわけじゃないか
ら
帰ってくることの恥じらいを誰もが空気のように知り尽くしていたあの頃なら
ば

今は一回りしたと思えるだからまた始めようくり返しのものでそうでない話を

89 光

「恐竜ノコトヲ考エルナ！」瞬間 君の頭に恐竜がいる。
テレビのニュースでは「戦争とテロルの死者」 ぼろ屑のような死体はここ
にあるか？

情報は遂にわたしに届かない ただ詩友あるのみ カフカさん

90 光

想像力の目、意志の手
送ってしまった空の封筒、拒絶済みの関係
十余年の晩夏、俺の蝉が奏鳴する

91 光

大いなる幻影は戦争の背中に張りついて蒸散したスコットランド桔梗
団子みたいにかたまって自由と平等に過飽食した重ね綴れの大麦の穂
円やかに醸いだ酒を飲む夜、夜、夜、夜 を点綴するはらわたの保守（世代

のめいて い)

92 冬

生き血を退屈のキャンバスにぶちまけたNYのモダンアーティストのたうつ切断されたすっぱんの首、首、首、首

この世のテロルは必ず容赦なき大阪の板前に操られているのだ

93 冬

地球の地下迷路の起点であるニューヨーク地下鉄小便臭い洞穴からカッパドキアの地下都市まで地底をぐるぐる巡りマートレインは火星へ行くんだって銀河鉄道に乗り替えてとびきり賑やかな天国の扉を叩きに行こう一人じゃ寂しいから

94 光

ファウストもパーティー天国乱交の幻影に囚われた魂を瞬時に売り渡す。

果てしなき抽挿の行為は年余にも反復して尽くすべからざる重圧である。

既にしてそれは四十億年の進化支配による奇形にあらずんばなんであるか。

95 光

西光一閃して萬秋將に墜むとす

密に懐旧す元百合韻の（朝のつくりが人羽）束

望らく搔跡終に慰むべし双孤心

96 冬

碧天にズームアップし地球回転する冷凍保存頭脳を見た

その日から所構わず通信がやって来る

蜘蛛の巣に囚われて妨害された減数分裂を救え

97 冬

情報という名のストレッサー「銃巢」をルーレットすると私が増える

ただしくは複製だその分だけ無機質化する私も一緒に人間辞める

レプリカントは反乱した時自分も滅ぶもちろん私も滅ぶそれだけ

98 光

死者に贈る言葉、魂鎮めの歌、語のかたちは微光に包まれて天空に移動する
(生身のうちから魂落つことしちまえばもうそんな歌にも用はねえが)

鳥よ、だがここは一番呼わって天翔ろ、そしてその声(るまたみみつき)の
秘密を生命の限り人間に伝えろ

99 冬

風、子供に吹け、夢、大きく天を突くぞ
花、大地を埋めよ、過ぎた、時を購い
海、淀みなく唱い、この星の塗炭を償え

100 光・冬、合わせ六行

百年の宇宙旅行の帰「地」祝いは相応に長いものとなるう。
昨時星雲は濁流しブラックホールに呑まれた鵜飼いを弔う。

左様、雪降るは星の如し、花咲くも又星の如しと。

千切れ千切れ(ジグソウパズル)の星図を内胎する母船への帰省既に世紀も代
り

乳房千々に乱れ、髓脳萬々に惑い、性愛の誉、粗筆の辱、伴に兆す陰陽異恥部
の嘆。

何れも散集の不分率円率も球率も不均律(アンバランス)の極する快率(エロ
チンズム)をも偏差せよ。